

振り返って感じる感謝：  
発達的变化を考慮した感謝の自伝的記憶の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 瑞穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4372">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4372</a>

## 振り返って感じる感謝 —発達的变化を考慮した感謝の自伝的記憶の検討—

児童教育学部 児童教育学科 北村 瑞穂

要旨：本研究では、感謝の自伝的記憶を回想した時に感じる感情と機能について探索的に検討を行った。感謝した出来事を経験した各時期（幼児期から現在）で、当時感じていた感情（感謝、うれしさ、すまなさ、お返しの義務感）の強さと、現在感じる感情の強さの差異を比較した。結果から、全体に感情の強度は出来事経験時期が現在に近いほど強かった。また、感謝、すまなさ、お返しの義務感は、出来事を経験した時期が現在から遠いほど、当時の感情と現在感じる感情の強さの差が大きくなった。つまり、年少の頃に受けた援助への感謝は、当時より現在において、より強く感じられることが示唆された。さらに出来事経験時期による自伝的記憶の機能（自己継続機能、行動方向づけ機能、社会的結合機能）の強さを検討したところ、いずれの機能も出来事経験時期が大学生に近づくにつれて強まった。最後に、これらの感謝に関わる道徳的感情の発達について考察した。

キーワード：感謝、発達、自伝的記憶、回想

小中学校で道徳の授業が教科として位置づけられ実施されることから、近年、道徳教育への関心が高まっている。そして、効果的な道徳の授業を行うために発達段階を考慮した授業内容が求められている（松尾、2016）。この道徳性の研究の中に“感謝”という感情を用いた研究がある。McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson (2001) は、感謝は共感や罪悪感のような道徳的感情に類似している感情であり、対人関係の変化を感じ取るバロメータであり、道徳的行動（向社会的行動）を促進し、非道徳的行動を抑制することができること述べている。しかし、本邦において感謝の発達の研究はあまり多くはない。

子どもの感謝が生起する状況と感謝の表現について、藤原・村上・西村（2013）が小学生を対象に調査したところ、感謝が生起する状況には大きく分けて道具的な被援助と情緒的な被援助の2種類あった。道具的な被援助とは、何かを作ってもらったり貸してもらったりすることなどである。情緒的な被援助とは、ポジティブな状況において褒めてもらったり、ネガティブな状況において励まされたりするなどである。また、感謝の表現は4種類あり、感謝の言明、返報行動、伝える際の表現、伝達方法があった。さらに、感謝の言明は返報行動より多く、すでに小学校高学年で感謝は言語を通じて行われていることが示された。

従来、感謝はポジティブ感情と捉えられてきた

（McCullough et al., 2001; Tsang, 2006）。しかし、感謝はより複合的な感情であり、それらの感情が複雑に発達している可能性がある。藤原・村上・西村・濱口・櫻井（2014）は、小学4年生から6年生を対象に調査を行い、児童用対人的感謝尺度を作成した。この尺度はポジティブ感情と正の相関があり、小学生高学年において感謝が強いほどポジティブ感情も高いことが示された。一方で、ネガティブ感情との間にも弱い正の相関があり、藤原ら（2014）は、このネガティブ感情が負債感の影響なのかは、今後の検討が必要であると述べている。

泉井（2009）は、幼児を対象とした予備調査において、助けられた出来事を答えた幼児全員がポジティブな気持ちを抱き、嫌な気持ちはしなかったと答えていることを報告している。さらに、泉井（2009）は第1調査において幼児と小学2年生と大学生の被援助時の不快感情の発達を、「逃げた猫を捕まえるのを手伝ってもらおう」という場面想定法を用いて調べた。結果から、幼児も小学2年生も「お返しをしなくてはいけない」とは強く感じているものの、「お返しができないことへの不快感情」に関しては返報への義務や責任を前提とする大人のような心理的負債をまだ持っていないことが示唆された。一方、4年生と6年生は成人と同様に返報ができなかったことに対して不快感情を抱いていたことが明らかになった（第2調査）。また、

大島 (2016) は児童期における未返報時の不快感情の発達的变化を検討している。友だち (または親) が忘れ物を自宅まで届けてくれたが、お返しすることができなかったという場面を設定し、未返報時の不快感情を小学2年生と4年生とで比較した。結果から、2年生では未返報時の不快感情は親よりも友だちに対するほうが高かった。この理由については、小学2年生は親が子どもを助ける義務がある存在であると考えており、友だちはそうではないので、友だちによる援助に返報できない場合は不快感情が高まるからと考えられている。一方、4年生では被援助者が友人か親かで未返報時の不快感情に差は見られず、返報が可能であると考えることが返報できないことを不快に思うことに影響していた。4年生にとって返報は責任や義務感を伴うものへと変化し、“できるはずの返報ができない”ことに対して未返報時の不快感情が生じると解釈された。これらの研究から、幼児期には被援助によってポジティブ感情とお返しの義務感が生じているが、まだお返しができないことへの不快感が生じていないこと、小学4年生頃からお返しできないことへの不快感が生じていること示されたといえる。

中学生から大学生の感謝の発達について、池田 (2006) は母親に対する感謝の心理状態を検討した。その結果、援助してくれることへのうれしさなどのポジティブ感情は中学生から大学生のどの時期でも感じられていた。中学生と高校生では、自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる傾向があるが、高校生から母親に負担をかけてすまないと感じる自責的な心理状態が現れる。そして、大学生では、すまなさ自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる傾向が小さくなり、援助してくれることへのうれしさが高まるという変化が現れた。中学生から大学生にかけて、徐々に自立が進み、親への感謝の在り方が、落ち着いた充足的なものに変化していることが確認された。以上のように、感謝の感情の内容は幼児から大学生にかけて、うれしさやすまなさや返報しなければならないという気持ちが複雑に発達していることが示唆されている。それでは、これらの発達を経て大人になり、過去の感謝の出来事を振り返ったとき、どのような感情を感じるのだろうか。また、これらの感謝の自伝的記憶を振り返ることにはどのような意味や機能があるのだろうか。

過去の自己に関わる情報の記憶を自伝的記憶という (佐藤・越智・下島, 2008)。私たちは、時折、過去に起こった出来事を振り返り、今の自分と過去の自分

を比較して成長を感じたり、望ましい自己像を思い描いたり、過去の失敗から学んで反省したり、将来への指針を得たり、他者に出来事を話して聞かせ、共有することで交友を深めたりする。このように過去に起こった出来事を振り返ったり、他者に話して聞かせたりすることには様々な機能がある。

Webster (1993, 1997) は、高齢者を対象とした回想法を使用した研究から、自伝的記憶の機能に着目し、8因子 (退屈の軽減、死の準備、アイデンティティ、問題解決、会話、親密さの維持、辛い経験の再現、情報伝達) から構成される回想機能尺度を作成した。17歳から88歳までの回想を調べた結果、回想頻度は年代によって変化しないが、回想機能には違いがあることが確認された。例えば、青年期はアイデンティティと問題解決と退屈の軽減と辛い経験の再現のために回想がなされることが多く、老年期では情報伝達や死の準備のための回想が多かった (Webster & McCall, 1999)。

Bluck, Alea, Habermas, & Rubin (2005) は、これまでの自伝的記憶研究から、少なくとも自伝的記憶には自己、社会、方向づけの3つの機能があると指摘している。佐藤ら (2008) によると、自己機能とは自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像の維持を支えたりするために役立つものである。社会機能は自伝的記憶が対人関係の形成・維持に役立つ面や対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼす働きを指す。方向づけ機能は自伝的記憶がさまざまな判断や行動の方向づけに役立つ働きを指す。Bluck et al. (2005) は、これらの3つの機能をもとに Telling About Life Scale (TALE尺度) を作成した。この尺度を大学生に実施した結果、方向づけ、自己の連続性、他者との関係を育む、他者との関係を作る、の4因子が抽出された。4因子のうち他者に関わる2因子は、いずれも他者との関係を強める機能があり、共通していると説明されている。さらに、同じ参加者に Webster (1997) の回想機能尺度も実施したところ、2つの尺度間で対応する機能が多いことが明らかにされている。

その後、Bluck & Alea (2011) は項目の修正を行い、自伝的記憶の3つの理論的機能 (自己機能、方向づけ機能、社会機能) を評定する15項目の新たな TALE尺度 (Thinking About Life Scale) を作成した。なお、この TALE尺度は、落合・小口 (2013) によって8項目の日本語版 TALE尺度が作成されており、一定の妥当性と信頼性が確認されている。このように、

現在のところ自伝的記憶は3つの機能の枠組みで検討されており、研究が進められている。

そこで、本研究では大学生が感謝の自伝的記憶を回想した時に感じる感情と機能について検討する。大島(2016)、泉井(2009)、藤原ら(2014)、池田(2006)で示されたように、感謝の感情は幼児から大学生にかけて複雑に発達している。大人になって、これらの過去の感謝の出来事を回想したとき、どのような感情を強く感じるのだろうか。また、これらの感謝の出来事を回想することにはどのような意味や機能があるのだろうか。Bluck & Alea(2011)で示された自伝的記憶の3つの機能の強さは、感謝した出来事を体験した年齢で異なるだろうか。この感情と機能が、感謝の出来事の実験時期によって変化するのも併せて検討する。本研究の目的は以下のとおりである。1つめは感謝の出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)で、当時感じていたと推測される感情(感謝、うれしさ、すまなさ、お返しの義務感)の強さと、現在、その出来事に対して感じる感情の強さの差異を比較することである。なお、本研究ではこれを感情経験時期(当時、現在)とする。前述の大島(2016)と泉井(2009)では、小学4年生頃から大人と同様のお返しができないことへの不快感が生じる可能性が示されている。幼児や小学生の低学年の頃にはこのような感情は明確には感じないが、高学年では感じるようになり、さらに池田(2006)に示されたように、中学生から大学生になると、すまなさが低下し、うれしさをより強く感じるようになる可能性がある。感謝に関わる感情を強く感じるようになった大学生は、現在から振り返ると年少の頃に受けた援助への感謝が、当時より強く感じられるのではないだろうか。つまり、感謝した出来事が現在の大学生の時期から遠いと、当時感じていた感情の強さと、現在感じる感情の強さの差が大きくなることが予測される。本研究では、これを大学生による感謝した出来事の回想から検討する。

2つ目の目的は、感謝の出来事経験時期における、自伝的記憶の機能の変化について検討することである。ライフスパンの中でも特に青年期に経験した出来事は、進路や恋愛など自分にとって重要と感じられるものが多い。そういった記憶は繰り返し想起され、アイデンティティや将来への決断や人間関係に影響を与えることが予想される。そこで、本研究では落合・小口(2013)の日本語版TALE尺度を使用し、感謝の出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、

中学生、高校生、大学生)における自伝的記憶の機能の変化を、自己継続機能、行動方向づけ機能、社会的結合機能の3つの機能から測定する。先行研究では、これまでの人生全体を振り返って自伝的記憶の機能を検討しているが、本研究では感謝の自伝的記憶に限定し、その機能を検討することにした。

なお、Howes, Siegel, & Brown(1993)は、子どもの最初期の記憶は、概ね正確であるが、一部正確でないものも含まれていることを明らかにしている。3、4歳以前に経験した個人的な出来事については、成人が自覚的に想起できない幼児期健忘が生じている可能性がある(Dudycha & Dudycha, 1933)。そのため、大学生にとって子どもの頃の感謝した出来事の想起と、当時の感情の強さを推定し、評定することは難しいはずである。本研究でも、特に幼児の頃の感謝の自伝的記憶は、正確でないか歪められている可能性がある。しかしながら、本研究では過去の出来事の記憶の正確性ではなく、記憶がどのように変化し、現在の自己に影響を与えているかを調べることを目的とするため、大学生による回想法によって探索的な検討を行う。

## 方 法

### 対象者

大阪府の女子大学生、138名を対象とした。

### 質問項目

感謝の出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)ごとに、“感謝した出来事の想起”の自由記述と“感謝した出来事を経験した当時の感情”の評定と“感謝した出来事を振り返って現在感じる感情”の評定と“日本語版TALE尺度”の評定を順に求めた。

**感謝した出来事の想起** 幼児の頃(順に、小学生低学年の頃、小学生高学年の頃、中学生の頃、高校生の頃、大学生の頃)に感謝した出来事を、その時の気持ちを思い出しながら、詳細に書くよう求めた。

**感謝した出来事を経験した当時の感情** 前述の感謝した出来事を経験した「当時」、感じた感情の強さを、「感謝」、「うれしい」、「すまない」、「お返しをしなければならない」の4項目について、“全く感じない(1点)”から“非常に感じる(7点)”の7件法で尋ねた。

**感謝した出来事を振り返って現在感じる感情** 感謝した出来事を振り返って、「今」、感じる感情の強さを、前述の感謝した出来事を経験した「当時」の感情



と同様に4項目について、7件法で尋ねた。

日本語版TALE尺度 落合・小口(2013)の日本語版TALE尺度を使用した。なお、日本語版TALE尺度では、“これまでの人生”について問うが、本研究では、先に自由記述を求めた“感謝した出来事”について回答を求めた。導入質問として“通常、あなたはどのくらいの頻度で、この出来事について振り返って考えますか”、“通常、あなたはどのくらいの頻度で、この出来事について、他の人に話をしますか”の2項目について回答を求めた。続いて、“次に示されている理由のために、どのくらいの頻度で、この出来事について振り返って考えたり話したりするかを示す回答を一つお選びください”と示した。そして、自己継続機能(“自分の信念が、時間とともに変化してきたかどうかについて気にかかる時”などの3項目)、行動方向づけ機能(“自分の過去の誤りから学びたいとき”などの3項目)、社会的結合機能(“対人関係において親密さをもっと深めたいと思うとき”などの2項目)の3つの機能で構成されている計7項目について“ほとんどしない(1点)”から“非常に頻繁にする(5点)”の5件法で回答を求めた。

#### 手続き

心理学の授業において一斉に実施した。最初に、この研究は大学生が自分についてどのような見方や感じ方をしているかについて知ることを目的としていること、参加は本人の自由意思であり、撤回してもいかなる不利益も生じないこと、得られたデータはすべて統計的に処理されるので、個人の回答が特定されることはないことを説明した。回答中に学生から質問が出た場合は、個別に質問に対応した。所要時間は約20分であった。

#### 結果

回答に不備があった10名を除き、128名の回答を分析対象とした。  
感謝した出来事を想起した時に感じる感情

感謝した出来事を想起した時に感じる感情の種類(感謝、うれしさ、すまなさ、お返しの義務感)別に、各出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)における、感情経験時期(当時、現在)の感情の強さの平均評定値をTable 1に示した。

各感情(感謝、うれしさ、すまなさ、お返しの義務感)において、当時の感情の強さと、現在感じる感情の強さの出来事経験時期による変化を検討するため、感情経験時期(当時、現在)と、出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)を独立変数とする2要因分散分析を行った。

感謝の強さを従属変数とする感情経験時期(当時、現在)と、出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)の2要因分散分析を行ったところ、感情経験時期の主効果と出来事経験時期の主効果と感情経験時期×出来事経験時期の交互作用がともに有意であった(順に $F(1, 127) = 23.05, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .15$ ;  $F(5, 635) = 10.80, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .08$ ;  $F(5, 635) = 3.84, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .03$ )。交互作用が有意であったため下位検定を行ったところ、幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生の各出来事経験時期における感情経験時期の単純主効果が有意であった(順に $F(1, 127) = 19.13, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .13$ ;  $F(1, 127) = 12.71, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .09$ ;  $F(1, 127) = 12.04, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .09$ ;  $F(1, 127) = 8.22, p < .01, \text{偏}\eta^2 = .06$ )。高校生と大学生の各出来事経験時期における感情経験時期の単純主効果は有意でなかった(順に $F(1, 127) = 1.05, ns, \text{偏}\eta^2 = .008$ ;  $F(1, 127) = 1.94, ns, \text{偏}\eta^2 = .015$ )。したがって、幼児から中学生にかけては、当時の感謝の強さより、現在感じる感謝の方が強かったが、高校生と大学生の時期では、当時の感謝の強さと、現在感じる感謝の強さに差がなくなることが明らかになった。さらに、当時の感謝の強さと、現在感じる感謝の強さの両方の感情経験時期において、出来事経験時期(幼

Table 1 出来事想起時期別の各感情の平均値

	当時						現在					
	幼児	低学年	高学年	中学生	高校生	大学生	幼児	低学年	高学年	中学生	高校生	大学生
感謝	5.45 (1.77)	5.43 (1.79)	5.75 (1.58)	5.78 (1.59)	6.34 (1.19)	6.41 (1.23)	6.08 (1.57)	5.89 (1.60)	6.18 (1.41)	6.16 (1.33)	6.45 (1.24)	6.52 (1.05)
うれしさ	5.80 (1.77)	5.57 (1.85)	5.38 (1.91)	5.54 (1.75)	6.08 (1.40)	6.14 (1.38)	5.84 (1.72)	5.62 (1.76)	5.74 (1.70)	5.79 (1.52)	6.09 (1.45)	6.28 (1.30)
すまなさ	2.59 (1.90)	2.84 (2.00)	3.07 (2.04)	3.77 (2.11)	4.18 (2.19)	4.46 (2.16)	3.60 (2.23)	3.81 (2.20)	3.86 (2.20)	4.40 (2.20)	4.58 (2.24)	4.59 (2.24)
お返しの義務感	2.98 (1.97)	3.27 (2.15)	3.42 (2.03)	3.88 (2.09)	4.82 (2.04)	5.23 (1.96)	4.26 (2.19)	4.13 (2.15)	4.14 (2.08)	4.46 (2.18)	5.13 (2.03)	5.27 (1.97)

Note. ( )内はSD

児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)の単純主効果が有意であったため(順に、 $F(5, 635) = 12.63, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .09$ ;  $F(5, 635) = 4.96, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .04$ )、Bonferroni法による多重比較を行った。その結果、当時の感謝の強さは、幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年、幼児と中学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .01$ ;  $d = .18$ ;  $d = .20$ )。幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .59$ ;  $d = .63$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学校低学年と中学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .19$ ;  $d = .21$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .60$ ;  $d = .64$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった( $ns, d = .02$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .42$ ;  $d = .46$ ;  $d = .40$ ;  $d = .44$ )。高校生と大学生で有意差はなかった( $ns, d = .06$ )。現在の感謝の強さは、幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年、幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生、小学生低学年と小学生高学年、小学校低学年と中学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .12$ ;  $d = .07$ ;  $d = .05$ ;  $d = .26$ ;  $d = .33$ ;  $d = .19$ ;  $d = .18$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .39$ ;  $d = .46$ )。小学生高学年と中学生、小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生、高校生と大学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .02$ ;  $d = .20$ ;  $d = .27$ ;  $d = .23$ ;  $d = .30$ ;  $d = .06$ )。したがって、幼児から大学生にかけて、全体的に当時と現在の感謝が強くなっていることが示された。

うれしさの強さを従属変数とする感情経験時期(当時、現在)と、出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)の2要因分散分析を行ったところ、感情経験時期の主効果が有意であり( $F(1, 127) = 4.70, p < .05$ , 偏 $\eta^2 = .04$ )、当時のうれしさより現在感じるうれしさが有意に強かった。さらに出来事経験時期の主効果が有意であったため( $F(5, 635) = 5.62, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .04$ )。Bonferroni法による多重比較を行った結果、うれしさの強さは、幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年、幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生、小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .14$ ;  $d = .16$ ;  $d = .11$ ;  $d = .17$ ;  $d = .27$ ;  $d = .02$ ;  $d = .05$ )。小学生

低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .32$ ;  $d = .41$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった( $ns, d = .07$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .34$ ;  $d = .44$ )。中学生と高校生で有意差はなかった( $ns, d = .30$ )。中学生と大学生で有意差があった( $p < .05, d = .41$ )。高校生と大学生で有意差はなかった( $ns, d = .10$ )。したがって、幼児から大学生にかけて、全体的にうれしさの強さが高まっていることが明らかになった。感情経験時期×出来事経験時期の交互作用は有意でなかった( $F(5, 635) = 1.81, ns$ , 偏 $\eta^2 = .01$ )。

すまなさの強さを従属変数とする感情経験時期(当時、現在)と、出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)の2要因分散分析を行ったところ、感情経験時期の主効果と出来事経験時期の主効果と感情経験時期×出来事経験時期の交互作用がともに有意であった(順に $F(1, 127) = 55.19, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .30$ ;  $F(5, 635) = 16.28, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .11$ ;  $F(5, 635) = 8.37, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .06$ )。感情経験時期×出来事経験時期の交互作用が有意であったため下位検定を行ったところ、幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生の各出来事経験時期における感情経験時期の単純主効果が有意であった(順に $F(1, 127) = 37.27, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .23$ ;  $F(1, 127) = 35.81, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .22$ ;  $F(1, 127) = 31.50, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .20$ ;  $F(1, 127) = 21.43, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .14$ ;  $F(1, 127) = 10.81, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .08$ )。大学生の時期における感情経験時期の単純主効果は有意でなかった( $F(1, 127) = 1.49, ns$ , 偏 $\eta^2 = .01$ )。したがって、幼児から高校生にかけては当時のすまなさの強さより現在感じるすまなさの方が強かったが、大学生では当時の感情の強さと、現在感じる感情の強さに差がなくなることが明らかになった。さらに、当時のすまなさの強さと、現在感じるすまなさの強さの両方の感情経験時期において、出来事経験時期の単純主効果が有意であったため(順に、 $F(5, 635) = 22.97, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .15$ ;  $F(5, 635) = 7.38, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .05$ )、Bonferroni法による多重比較を行った。その結果、当時のすまなさの強さは、幼児と小学生低学年、幼児と高学年小学生で有意差はなかった( $ns$ , 順に $d = .12$ ;  $d = .24$ )。幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった( $p < .05$ , 順に $d = .58$ ;  $d = .77$ ;  $d = .92$ )。小学生低学年と小学生高学年で有意差はな

かった ( $ns, d = .11$ )。小学生低学年と中学生、小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生、小学生高学年と中学生、小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .43; d = .61; d = .75; d = .34; d = .52; d = .66$ )。中学生と高校生で有意差はなかった ( $ns, d = .19$ )。中学生と大学生で有意差があった ( $p < .05, d = .33$ )。高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns, d = .13$ )。現在のすまなさの強さは、幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .10; d = .12$ )。幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .36; d = .44; d = .44$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学校低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .02; d = .27$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .35; d = .35$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns, d = .25$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .32; d = .33$ )。中学生と高校生、中学生と大学生、高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .08; d = .08; d = .003$ )。したがって、幼児から大学生にかけて、全体的に当時と現在のすまなさが強くなっていることが明らかになった

お返しの義務感の強さを従属変数とする感情経験時期 (当時、現在) と、出来事経験時期 (幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生) の 2 要因分散分析を行ったところ、感情経験時期の主効果と出来事経験時期の主効果と感情経験時期  $\times$  出来事経験時期の交互作用がともに有意であった (順に  $F(1, 127) = 46.33, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .27$ ;  $F(5, 635) = 28.39, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .18$ ;  $F(5, 635) = 11.92, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .09$ )。感情経験時期  $\times$  出来事経験時期の交互作用が有意であったため下位検定を行ったところ、幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生の各出来事経験時期における感情経験時期の単純主効果が有意であった (順に  $F(1, 127) = 47.49, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .27$ ;  $F(1, 127) = 23.85, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .16$ ;  $F(1, 127) = 26.42, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .17$ ;  $F(1, 127) = 15.81, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .11$ ;  $F(1, 127) = 5.45, p < .05$ , 偏  $\eta^2 = .04$ )。大学生の時期における感情経験時期の単純主効果は有意でなかった ( $F(1, 127) = 0.35, ns$ , 偏  $\eta^2 = .002$ )。したがって、幼児から高校生にかけては当時のお返しの義務感の強さより現在感じる感情の方が強かったが、大学生では当時の感情の強さと、現在感じる感情の強さに差がなくなる

ことが明らかになった。さらに、当時のお返しの義務感の強さと、現在感じるお返しの義務感の強さの両方の感情経験時期において、出来事経験時期の単純主効果が有意であったため、(順に、 $F(5, 635) = 38.79, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .23$ ;  $F(5, 635) = 12.11, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .09$ )、Bonferroni法による多重比較を行った。その結果、当時のお返しの義務感の強さは、幼児と小学生低学年、幼児と高学年小学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .14; d = .22$ )。幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .44; d = .92; d = 1.15$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .08; d = .29$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .74; d = .95$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns, d = .22$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .69; d = .91; d = .46; d = .67$ )。高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns, d = .20$ )。現在のお返しの義務感の強さは、幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年、幼児と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .06; d = .06; d = .09$ )。幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .41; d = .49$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学校低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .01; d = .16$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .48; d = .56$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns, d = .15$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .48; d = .56; d = .32; d = .39$ )。高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns, d = .07$ )。したがって、幼児から大学生にかけて、全体的に当時と現在のお返しの義務感が強くなっていることが明らかになった。

#### 感謝の自伝的記憶の機能

日本語版TALE尺度の内的信頼性を確認した。自己継続機能の3項目について、各出来事経験時期 (幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生) の  $a$  係数を求めたところ、順に、 $a = .91, .92, .92, .92, .88, .93$ であった。次に、行動方向づけ機能の3項目について、各出来事経験時期の  $a$  係数を求めたところ、順に、 $a = .87, .88, .87, .85, .86, .83$ であった。次に、社会的結合機能の2項目について、各時期の  $a$  係数を求めたところ、 $a = .90$ ,



Table 2 感謝の自伝的記憶の各機能の平均値

	幼児	低学年	高学年	中学生	高校生	大学生
振り返る頻度	1.99 (1.06)	2.28 (1.11)	2.52 (1.33)	2.55 (1.26)	3.27 (1.28)	3.58 (1.24)
他者に話す頻度	1.59 (0.96)	1.90 (1.02)	2.17 (1.29)	2.09 (1.21)	2.53 (1.46)	2.98 (1.42)
自己継続機能	2.11 (1.03)	2.16 (1.04)	2.24 (1.14)	2.40 (1.13)	2.63 (1.15)	2.70 (1.31)
行動方向づけ機能	2.16 (1.04)	2.25 (1.07)	2.30 (1.13)	2.48 (1.12)	2.71 (1.18)	2.70 (1.22)
社会的結合機能	2.19 (1.09)	2.18 (1.09)	2.18 (1.06)	2.39 (1.00)	2.63 (1.13)	2.48 (1.08)

Note. ( )内はSD

.91, .93, .87, .85, .88であった。したがって、自己継続機能、行動方向づけ機能、社会的結合機能の3つの自伝的記憶の機能について十分な内的整合性が確認された。

感謝の自伝的記憶の各機能の平均値をTable 2に示した。感謝の自伝的記憶の機能の発達的变化を検討するため、出来事経験時期（幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生）を独立変数とする1要因分散分析を行った。

感謝した出来事を振り返る頻度を従属変数とする出来事経験時期（幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生）の1要因分散分析を行ったところ出来事経験時期の主効果が有意であった ( $F(5, 635) = 48.10, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .27$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、感謝した出来事を振り返る頻度は、幼児と小学生低学年有意差はなかった ( $ns, d = .27$ )。幼児と小学生、高学年幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .44; d = .48; d = 1.08; d = .65$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .20; d = .22$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .82; d = 1.10$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns, d = .02$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .57; d = .82; d = .57; d = .83$ )。高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns, d = .25$ )。したがって、幼児から大学生にかけて感謝した出来事を振り返る頻度が増えていることが明らかになった。

感謝した出来事を他者に話す頻度を従属変数とする出来事経験時期（幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生）の1要因分散分析を行ったところ出来事経験時期の主効果が有意であった ( $F(5, 635) = 32.31, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .18$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、感謝した出来事を他者に話す頻度は、幼児と小学生低学年で

有意差はなかった ( $ns, d = .32$ )。幼児と小学生、高学年、幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .52; d = .46; d = .77; d = 1.15$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .24; d = .17$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .50; d = .87$ )。小学生高学年と中学生、小学生高学年と高校生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .07; d = .26$ )。小学生高学年と大学生、中学生と高校生、中学生と大学生、高校生と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .59; d = .33; d = .68; d = .31$ )。したがって、幼児から大学生にかけて感謝した出来事を他者に話す頻度が増えていることが示された。

自己継続機能を従属変数とする出来事経験時期（幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生）の1要因分散分析を行ったところ、出来事経験時期の主効果が有意であった ( $F(5, 635) = 16.27, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .09$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、自己継続機能は幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .05; d = .12$ )。幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .26; d = .48; d = .50$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .07; d = .22$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .43; d = .46$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns, d = .14$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に  $d = .34; d = .38$ )。中学生と高校生で有意差はなかった ( $ns, d = .21$ )。中学生と大学生で有意差があった ( $p < .05, d = .25$ )。高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns, d = .06$ )。したがって、幼児から大学生にかけて感謝した出来事の自己継続機能は高まっていることが明らかになった。

行動方向づけ機能を従属変数とする出来事経験時期（幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生）の1要因分散分析を行ったところ出来事経験時期の主効果が有意であった ( $F(5, 635) = 14.33, p < .01$ , 偏  $\eta^2 = .08$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、行動方向づけ機能は幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年で有意差はなかった ( $ns$ , 順に  $d = .09; d = .13$ )。幼児と中学生、幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順



に $d = .29$ ;  $d = .50$ ;  $d = .48$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に $d = .04$ ;  $d = .20$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に $d = .41$ ;  $d = .39$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ ,  $d = .16$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に $d = .36$ ;  $d = .34$ )。中学生と高校生、中学生と大学生、高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に $d = .21$ ;  $d = .19$ ;  $d = .01$ )。したがって、幼児から大学生にかけて感謝した出来事の行動方向づけ機能は高まっていることが明らかになった。

社会的結合機能を従属変数とする出来事経験時期(幼児、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生、大学生)の1要因分散分析を行ったところ出来事経験時期の主効果が有意であった( $F(5, 635) = 12.77, p < .01$ , 偏 $\eta^2 = .07$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、自己継続機能は幼児と小学生低学年、幼児と小学生高学年、幼児と中学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に $d = .01$ ;  $d = .004$ ;  $d = .20$ )。幼児と高校生、幼児と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に $d = .40$ ;  $d = .27$ )。小学生低学年と小学生高学年、小学生低学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ ,  $d = .004$ ; 順に $d = .21$ )。小学生低学年と高校生、小学生低学年と大学生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に $d = .40$ ;  $d = .28$ )。小学生高学年と中学生で有意差はなかった ( $ns$ ,  $d = .20$ )。小学生高学年と高校生、小学生高学年と大学生、中学生と高校生で有意差があった ( $p < .05$ , 順に $d = .41$ ;  $d = .27$ ;  $d = .22$ )。中学生と大学生、高校生と大学生で有意差はなかった ( $ns$ , 順に $d = .08$ ;  $d = .14$ )。したがって、幼児から大学生にかけて感謝した出来事の社会的結合機能は高まっていることが明らかになった。

## 考 察

大人になって過去の感謝した出来事を回想したとき、どのような感情を感じるのか。また、感謝の自伝的記憶を回想には、どのような意味や機能があるのか。本研究では大学生が感謝の自伝的記憶を回想した時に感じる感情と機能を探索的に検討した。

本研究の目的の1つは感謝の出来事経験時期で、当時感じていたと推測される感情(感謝、うれしさ、すまなさ、お返しの義務感)の強さと、現在、感じる感情の強さの差を比較検討することであった。結果から、感謝に関わる感情全てが幼児期から大学生にかけ

て強まった。また、感謝は、幼児から中学生まで、当時より現在感じる感情の方が強いが、高校生と大学生では差がなくなった。すまなさとお返しの義務感は、幼児から高校生まで当時より現在感じる感情が強いが、大学生では差がなくなった。つまり、感謝に関わる感情を強く感じるようになった大学生は、現在から振り返ると年少の頃に受けた援助への感謝が、当時より強く感じられていた。感謝の出来事経験時期が現在から遠くなると、当時感じていた感情と現在感じる感情の強さの差が大きくなっており、本研究の予測が支持されたと言える。なお、年少の頃は大学生である現在ほどには感謝していなかったことを、大学生本人がどの程度自覚できているかは本研究の範囲では明らかではない。しかし、年少の頃に受けた援助の大きさを振り返って確認することには、道徳的感情のメタ認知を促す可能性があるだろう。

感謝とすまなさとお返しの義務感、おおよそ同じ傾向が見られ、感謝した出来事の生じた時期が現在に近づくにつれて当時と現在の感情は強まった。したがって、全体的には感謝に関わるこれらの感情が発達しており、先行研究と同様の結果が示されたと言える。しかし相違点もあり、大島(2016)と泉井(2009)では小学4年生頃からお返しができないことへの不快感が生じたが、本研究では小学校低学年と高学年の間で、すまなさやお返しの義務感に差は確認できなかった。また、池田(2006)で示された大学生における、すまなさを低下も確認できなかった。これらの違いは本研究が回想法を使用しているため生じているのかもしれない。また、池田(2006)は感謝の対象を母親に限定していたため、本研究のような感謝の対象を限定していない場合は結果が異なった可能性もある。なお、うれしさも感謝した出来事の時期が現在に近づくにつれて感情が強まった。しかし、他の3つの感情とは異なり、当時と現在の感情の強さの差が縮まる傾向はなく、当時より現在の方が一貫して強く感じていた。このことから、うれしさは、感謝やすまなさやお返しの義務感とは異なる性質を持つ可能性がある。

2つ目の目的は、感謝の出来事経験時期による自伝的記憶の機能の変化について検討することであった。結果から、感謝した出来事を振り返る頻度、感謝した出来事を他者に話す頻度、自己継続機能、行動方向づけ機能、社会的結合機能のいずれも、感謝の出来事経験時期が現在に近づくにつれて、高まった。ライフスパンを通して自伝的記憶を検討した場合、アイデンティティが確立される10代から20代にかけての出来事

は記憶が保持されやすいレミニセンス・バンプが生じることが知られている (Conway & Holmes, 2004)。本研究で行った感謝の自伝的記憶の回想でも、高校生と大学生の頃の自伝的記憶を繰り返し思い出す傾向が高まった。特に青年期に経験した出来事は、将来の進路など自分にとって重要と感じられる出来事が多いはずである。そういった重要な記憶は繰り返し想起され、アイデンティティや将来への決断や人間関係に影響を与えることが予想される。

今後の課題として、以下の点が挙げられる。本研究では、回想する感謝の出来事が生じた時期が大学生に近づくにつれて、感謝やうれしさやすまないという感情やお返しへの義務感が強まった。しかし、これが発達の影響か単なる時間経過の影響かを区別することができていない。また、本研究では女性のみでの感謝の自伝的記憶を扱った。藤原ら (2014) によると、対人的感謝得点には性差があり、男児より女児の得点が高いことが示されている。今後は性差も考慮した検討が必要となる。

#### 引用文献

- Bluck, S., Alea, N., Habermas, T. and Rubin, D. C. (2005). A tale of three functions: the self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition*, 23, 91-117.
- Bluck, S., & Alea, N. (2011). Crafting TALE: Construction of a measure to assess the functions of autobiographical remembering. *Memory*, 19, 470-486.
- Conway, M. A., & Holmes, A. (2004). Psychosocial stages and the availability of autobiographical memories. *Journal of Personality*, 72, 461-480.
- Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. (1933). Some factors and characteristics of childhood memories. *Child Development*, 4, 265-278.
- Howes, M., Siegel, M., & Brown, F. (1993). Early childhood memories: Accuracy and affect. *Cognition*, 47, 95-119.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨 (2013). 小学生における感謝生起状況とその表明についての探索的研究 筑波大学発達臨床心理学研究, 24, 19-26.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196.
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 教育心理学研究, 54, 487-497.
- 泉井みずき (2009). 被援助時の不快感情の発達 いつから助けられることを不快に感じるのか 学校教育学研究論集, 20, 1-15.
- 松尾直博 (2016). 道徳性と道徳教育に関する心理学的研究の展望—新しい時代の道徳教育に向けて— 教育心理学年報, 55, 165-182.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249-266.
- 落合勉・小口孝司 (2013). 日本語版TALE尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 84, 508-514.
- 大島みずき (2016). 児童期における未返報時の不快感情の発達の变化 感情心理学研究, 23, 87-94.
- 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) (2008). 自伝的記憶の心理学 北大路書房
- Tsang, J. (2006). Gratitude and prosocial behavior: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, 20, 138-148.
- Webster, J. D. (1993). Construction and validation of the reminiscence functions scale. *Journal of Gerontology*, 48, 256-262.
- Webster, J. D. (1997). The reminiscence functions scale: a replication. *International Journal of Aging and Human Development*, 44, 137-148.
- Webster, J. D., & McCall, M. E. (1999). Reminiscence functions across adulthood: A replication and extension. *Journal of Adult Development*, 6, 73-85.